

エッセイ

古歌を訪ねて―その七 「古今和歌集・仮名序」 の冒頭文

丹下 重明

日本で最初の勅撰和歌集が「古今和歌集」（以下古今集）です（延喜5年・905年撰進とされていますが異説もあります）。この歌集の冒頭にある序文が「仮名序」を書いたのが撰者の一人で、平安時代前期を代表する歌人の紀貫之（872～946）です。この仮名序は日本の文学史上、名文の一つとして知られています。

その名称のとおり全文が「かな文字」で書かれていることや、和歌く倭歌について、その起源や効用、時代的発展の状況などについて、初めて公式に論説されていることなど、画期的な特徴がみられます。そうした中で、特に注目されるのは、冒頭の文章が、広く今日でも貴重な文学論になっていることです。

今回はそのことに絞って考えてみたいと思います。それは次のよ

うな文章です。

『和歌は、人の心を種として、萬の言の葉とぞなれりける。世の中にある人、事・業しげきものなれば、心に思ふ事を、見るもの聞くものにつけて、言ひだせるなり。花に鳴く鶯、水に住むかはづの声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。

力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女のなかをもやはらげ、猛き武士の心をもなぐさむるは、歌なり。』

この後も仮名序の文章は長く続くのですが、ここにあげた冒頭十行余だけで、著者の貫之が、このわが国初の勅撰和歌集の編纂に携わるにあたって、どれほど熱い思いと決意を以てのぞんだかが窺えるのです。（勿論、原文はほとんど「ひらがな」で書かれています）貫之は当然のことながら、「和歌」について述べているのですが、今日、この一文を読んでもみると、和歌という一語を「文学」に置き換えれば、そのまま今日にも通じる言葉であり文章だと思えます。特に傍線を付した後半部分にそれが感じられて、強く心を動か

されます。

◇ ◇ ◇

前回に続き、今回もまた作家の村上春樹氏の文章をとりあげさせてもらい恐縮なのですが、2015年秋に、村上春樹氏が出された自伝的エッセイ「職業としての小説家」を読みました。その中の第十回「誰のために書くのか？」という項目に、自分の作品が読者の心を動かしてくれればいいな、との願いをこめて、次のように書いておられます。すこし長くなりませんがあげさせてもらいます。

『自分の書いた本が男女の区別なく同じように読者の心を喚起し、動かしてくれればいいなと思っています。』

（中略）

小説というものは、物語というもの、男女間や世代間の対立や、その他様々なステレオタイプな対立を宥め、その切っ先を緩和する機能を有しているものだ、と僕は常々考えているからです。それは言うまでもなく素晴らしい機能です。自分の書く小説がこの世界の中で、たとえ少しでもいいからそういうポジティブな役割を担ってくれることを、僕はひそかに願っ

ているのです』

「小説」や「物語」という言葉を「和歌」に置き替えてみれば、村上氏は、まさに前記の仮名序傍線部分とほぼ同じことを言っておられると思うのです。文学の効用について、謙虚でありながら広く深い視野で語っておられることが感じられます。勿論今日では、文学の効用についての発言は数多くあり珍しくはないのですが。

◇ ◇ ◇

この「仮名序」冒頭部分には、古今集という、わが国初の勅撰和歌集撰者の中心人物だった、紀貫之の強い使命感が感じられます。

平安時代初期の9世紀は、漢風文化全盛の時代でした。詩文といえば漢詩で勅撰集も漢詩が先行しました。先輩格に「万葉集」という偉大な和歌集がありながら、和歌は公式の場では日陰者でした。それが800年代後半からようやく復活してきました。和歌を中心とする国風文化の復活です。

それを支えた要因はいくつかあるのですが、その一つが「女手」と呼ばれた、「ひらがな文字」の創造と発達でした。9世紀半ばの頃には在原業平、小野小町、僧正

遍昭などの六歌仙も、ひらがなを使つて多くの秀歌を詠んでいます。和歌以外でも、物語文学の「竹取物語」「伊勢物語」などが、ひらがなを使った初めての物語作品として、9世紀から10世紀にかけて出現しています。11世紀当初の「源氏物語」などの華やかな王朝女流文学も、このひらがな文字があつたればこそそのものと言えます。

同じ10世紀前後、宇多天皇(59代)の寛平年間には史上名高い「是貞親王家歌合」「寛平御時后宮歌合」など、宮廷中心の歌合も盛んに開催されるようになったのです。この寛平年間から次代の延喜年間にかけて古今集に優れた歌を遺した多くの有名歌人が、この時代に活躍しています。後記の古今集の四人の撰者のほか、藤原敏行、藤原興風、大江千里、文屋朝康、坂上是則、伊勢などなど。

こうした機運の中で生まれたのが「古今集」です。巻数20巻・約一〇〇首、当代から見た古今の秀歌を集めました。勅命を下したのは、醍醐天皇(60代)でした。延喜5年(905年)といわれていますが、冒頭に述べたとおり、

今日では異説もあります。この歌集はその後永く勅撰和歌集の規範となりました。撰者は貫之のほか紀友則、壬生忠岑、凡河内躬恒で、歌人としては当代一流の人ですが、いずれも六位以下の卑官でした。その中で最年長だった紀友則は貫之の年長の従兄弟でしたが、任半ばで亡くなり、以降は貫之が撰者の中心となります。

◇ ◇ ◇

紀氏は貴族として、遠く大和時代から続く名門で、一族から納言や参議も出ていました。元々は武門の家柄でしたが、貫之の頃は、むしろ文人として知られ、古今集にも紀氏一族の人物十一人の歌が採られています。この時代には、藤原時平を筆頭とする藤原北家が摂関政治により権勢を握り、紀氏一門は、官人としては五位程度の地方の国守としての受領階級止まりがほとんどでした。貫之も例外ではなく、古今集撰者となった34才の時七位御書所預で、それから10余年後、46才でやっと従五位下となっています。「土左日記」で知られる土佐守には59才で任ぜられました。この時もまだ従五位下でした。従五位上と

なつたのは、亡くなる数年前の72才の時でした。

貫之が国家的文化事業といえる古今集編纂の撰者に指名されたことは、望外の名誉であり喜びだったと推察されます。その古今集の冒頭の「仮名序」を書くにあつた貫之の緊張や気負いが、その冒頭部分の十数行から、強く感じられるのです。

こうして紀貫之は古今集撰者として、またその仮名序の著者として、当時の宮廷貴族歌壇の第一人者とされたのです。

◇ ◇ ◇

古今集には、貫之の歌が一〇二首入集しています。古今集の歌人130人中もつとも多い歌数です。貫之が採歌の上でも中心となつて、一般的に知られている歌は、以下にあげた二首くらいではないかと思うのです。特に先の一首は後に藤原定家が編纂した「小倉百人一首」に採られていて、よく知られています。

人はいさ心も知らずふるさは
花ぞむかしの香にほひける

古今・春歌上(42)
百人一首(35)
さくら花散りぬる風のなごりには
水なき空に波ぞ立ちける
古今・春歌下(89)

後の歌は、古今集歌の技巧的理性的性格を代表する一首として、よく取り上げられる歌です。

貫之は平安時代前期の優れた歌人といえるのですが、前記のとおり、今日その詠歌として、一般に知られる歌の少なさに淋しさを感じます。けれども冒頭にあげた「古今集・仮名序」の初めの十数行は、不朽の名文として、これからも永く、日本文学史上に語り継がれて行くものと思つていきます。

おわり

